

【しょっちゅう】

「しょっちゅう」は「年中」とか「いつも」という意味の言葉ですが、漢字で記すと、初めての“初”に、真ん中の“中”をあわせて、「初 中」となります。

この「初 中」に最後の“後”を加えた、“初中後”（しょ・ちゅう・ご）という言葉がおおもとになっているといわれています。

“初 中 後”という言葉は、お釈迦さまの教えとしてお経の中に登場します。

お釈迦さまが布教の旅に出かける弟子たちに語りました。

「初め善く、中 頃も善く、後にも善く、道理と表現を兼ね備えた教えを説きなさい」

また、『法華経』にも「正しい教えを説くに、初 善、中 善、後善なり」とあります。

この部分を、“初中後”（しょ・ちゅう・ご）とまとめた形で呼ぶようになり、やがて“後”の部分が略され、「初中（しょ・ちゅう）」が「しょっちゅう」に変化していったと考えられます。

「初め善く、中 頃も善く、後にも善く」ということは「いつも」という意味でしょう。「いつも」道理と表現を兼ね備えた教えを説きなさいとお釈迦さまはおっしゃったわけです。

その「初中後（しょ・ちゅう・ご）」が変化した「しょっちゅう」という言葉も、そのような意味で用いられるようになったと考えられます。

【希望】

「希望」という語は、中国語の書籍にも用例はありますが、日本語に取り入れられたのは、仏教語が先のようなのです。読み方も「希望（きぼう）」ではなく「希望（けもう）」と読みました。

インドの古い言葉であるサンスクリット語の「アビラーシャ」がもとの言葉で、「富や名誉を強く望む」という意味を持っています。

富や名誉を求める心は、仏道修行の大きなさまたげになるので、「希望戒」という戒めが制定されています。

やがてその用法がひろがり、意味も単に「のぞむ」ことや、未来への明るい見通しなどの意味になっていったと考えられます。

それに 伴い、発音も「希望（けもう）」から「希望（きぼう）」に変化していったようです。富や名誉にとらわれることなく、未来にのぞみたいものです。